今西順吉教授還暦記念論集

インド思想と仏教文化　抜刷

平成８年12月　春秋社刊

iṣṭā-pūrtá-「祭式と布施の効力」と来世

阪本（後藤）純子

1　iṣṭā-pūrtá-「祭式と布施の効力」

自身のために祭式を行う者、即ち祭主にとっては、その祭式により何を獲得できるかが当然大きな関心事であったに違いない。祭式の目的にはそれぞれの祭式の性格に応じて、長命、食物の獲得、子孫や家畜の増殖、権勢、富貴、敵対者・競争者に打ち勝つ事など様々な事柄が挙げられようが、とりわけ重大な問題は祭主自身の死後のあり方、即ち来世であったと思われる。他方、他人のために祭式を行う者、即ち祭官にとっては、祭式自身の意義・役割をもとより深く認識していたとしても、同時に、その祭式により得られる報酬(dā́kṣiṇā-) に深い関心が寄せられた。彼らは祭主に可能な限り多くの祭式を行うよう奨励するとともに、祭官への報酬が祭式の必要不可欠な構成要素である事を強調し、更にバラモンは「人間である神々」であるからバラモンへの贈与は神々への献供に等しい（後述 3 (2)および註(17)参照）という理論に基づき、自らの得る報酬を意義づけようと努力する。かくして、ヴェーダ・サンヒターに始まりブラーフマナを中心とする文献群において、祭式とそれに付随する祭官への報酬が、いかにして来世の望ましいあり方——天界における尽きることない幸福の享受——を祭主に保証するかという理論のめざましい発達が見られる。

このような背景のもとに成立した概念が iṣṭā-pūrtá- である。これは yaj「祭る」の過去分詞 iṣṭá- と par^{i}「贈る」の過去分詞 pūrtá- との dvandva 複合語であるが、普通は集合名詞として中性単数で用いられる[(1)]。ある者にとっての(Gen.) iṣṭā-pūrtá- とは、「(その者により) 祭られたもの (祭式) と贈られたもの (布施)」即ち「その人が生きている間に祭主として祭った祭式と祭官に贈った布施との総体」を指す。祭主によりなされたそれらの行為は、祭主の生

存中は潜在的な力として蓄積し続け、死後はじめて結果として発現し、祭主の来世でのあり方を決定する[(2)]。この意味において iṣṭā-pūrtá- は、祭式・布施が為された瞬間から死後発現するまで継続する「祭式と布施の効力ないし功徳」の価値で術語として用いられる。

祭主と iṣṭā-pūrtá- の関係はおおむね次のようにまとめられる：祭られた祭式も贈られた布施もともに火に献ぜられた献供として祭火の道を通り先に天に到達する[(3)]；その後を追って祭主が死後、天界に上昇する（火葬により自ら献供として火に投ぜられ、祭火の道を通り、天界に到達する）；あの世で祭主を待っていた献供（祭式・布施）が、死後到着した祭主と合体する。後述2参照。

あの世での生活は死後祭主と合体した iṣṭā-pūrtá- から成り立ち、来世のあり方は質・量ともに iṣṭā-pūrtá- により決定される。生活を構成する最重要要素は食物であること、ならびに神々への献供もバラモンへの布施も食物が中核となることから、iṣṭā-pūrtá- はしばしば食物の如く想定され、とりわけバラモンに献ずる粥（Brahmaudana ないし Anvāhārya）が pūrtá- の代表として前面に現れる。後述3参照。

他方、先に天に昇った iṣṭā-pūrtá- が死後必ずその行為を行った祭主自身に帰属する事が保証されねばならなかった。もし自分の祭り贈った行為の効力が他人の所有に帰するならば、自分の来世はなくなり、生前の努力は無に帰してしまう。同様に自分の iṣṭā-pūrtá- がいつか尽きて無くなる事が真剣に憂慮された。その場合には天界での生が終了し再び地上へと戻る、即ち再死（punar-mṛtyú-）に至るからである（後述2⑷参照）。このような iṣṭā-pūrtá- の喪失と滅尽とに対する深い危惧がそれに対する祭式上の対策を発達させ、祭式文献のとりわけ祭主に関する部分に収録されている。後述3・4・5参照。

このような祭式・布施と祭主の来世との関係を探求する iṣṭā-pūrtá- の理論の展開の上に、やがて来世におけるアートマンの理論が他の様々な理論を吸収しつつ成立したものと思われる。後述6参照。

本稿においては特に重要と思われる資料に基づきつつ iṣṭā-pūrtá- の理論を跡づけたい。

2　iṣṭā-pūrtá- と死後の世界

(1)

RV では iṣṭā-pūrtá- の語は X 14,8（≅ *AV* XVIII 3,58 ; ab ≅ *TĀ* VI 4,2）に 1 度だけ現れる。X 14,1-16 は Yama への讃歌（いわゆる「死者の歌」群の一つ）であるが、はじめて死者の行く道を発見した Yama を讃えて祭式へと召喚するとともに、新たに亡くなった者がその道を辿り、Yama と Varuṇa が共に楽しむ最高天に至り、父祖（祖霊）、Yama および iṣṭā-pūrtá- と合体することを求める。

7．préhi préhi pathíbhiḥ pūrv$_{i}$yébhir ¦ yátrā naḥ pū́rve pitáraḥ pa-reyuḥ /
ubhā́ rā́jānā svadhā́yā mádantā ¦ yamám paśyāsi váruṇaṃ ca devám //
〔君は〕行ってしまえ、行ってしまえ、太古の道達（pl.）を通って、我々の太初の父祖達がそこへと行ってしまったところへ。svadhā́ により酔っている（楽しんでいる）両王を、Yama と神 Varuṇa とを君は見るであろう。

8．sám̐ gachasva pitṛ́bhiḥ sám̐ yaméne- ¦ $_{i}$ṣṭāpūrténa paramé v$_{i}$-yòman /
hitvā́yāvadyám púnar ástam éhi ¦ sám̐ gachas$_{u}$va tan$_{ū}$vā́ suvár-cāḥ //
父祖達と合体せよ、Yama と、祭られたものと贈られたもの〔の効力〕(iṣṭā-pūrtá-) と最高所の天穹において。欠陥（口外すべからざる事）を捨て去った後、再びわが家[4]へと帰れ。良き効力（várcas-）を持つ者として身体／自己（tanū́-）[4]と合体せよ。

ここには、死者の iṣṭā-pūrtá-、即ち彼が生前に祭主として祭った祭式と贈った布施とが、既に先に最高天に到達しており、Yama や祖霊達と同様に死者を待ち受けて彼と合体する事が明瞭に示されている。

(2)

AV の段階になると iṣṭā-pūrtá- の用例は増大し、多様な思想的発展を示す。[5]

その中でもとりわけ重要なものはVI 123,1-5（火葬の歌）であり、火葬されて最高天に昇り行こうとする祭主とiṣṭā-pūrtá-との関係が一層明瞭な形で示されている。

1．etā́m sadhasthāḥ pári vo dadāmi ˡ yā́ṃ śevadhím āvā́hāj jātávedāḥ /
anvāgantā́ yájamānaḥ s$_u$vastí ˡ tā́ṃ sma jānīta paramé v$_i$yòman //
jātávedas（火）が宝として運んで行くことになるこの者（死者）を、集い合う者達（祖霊達？）よ、君達に私は譲り渡す。祭主は安寧に〔君達に〕従い〔君達のもとへ〕到るだろう；彼を最高所の天蓋において君達は認知してほしい。

2．jānītá smainaṃ paramé v$_i$yòman ˡ dévāḥ sádhasthā vidá lokám átra /
anvāgantā́ yájamānaḥ s$_u$vastī̀- ˡ $_i$ṣṭāpūrtā́ṃ sma kr̥ṇutāvír asmai //
君達は彼を最高天において認知してほしい。神々よ。集い合う者達よ（どちらも文頭のVok.）。君達は今ここに〔彼の死後の〕世界を知っている。祭主は安寧に〔君達に〕従い〔君達のもとへ〕到るだろう；**彼に対して君達は〔彼により〕祭られたものと贈られたもの**（iṣṭā-pūrtá-）**を明らかにせよ。**

3．dévāḥ pítaraḥ pítaro dévāḥ / yó ásmi só asmi //
神々よ。祖霊達よ。祖霊達よ。神々よ（4語とも文頭のVok.；後述4(1)参照「神々である祖霊達よ、祖霊達である神々よ」）。私は私がそれであるところの者である。

4．sá pacāmi sá dadāmi sá yaje sá dattā́n mā́ yūṣam //
そのような者として私は調理する。そのような者として私は与える。そのような者として私は（祭主として）祭る。**そのような私が〔私により〕与えられたもの**（dattá-）**から離れぬことがないように。**

5．nā́ke rājan práti tiṣṭha ˡ tátraitát práti tiṣṭhatu /
viddhí pūrtásya no rājant ˡ sá deva sumánā bhava //
天穹において、王（Yama?, Varuṇa?, Soma?）よ、しっかりと立て。そこにこれ（私により与えられたもの）は、しっかりと立て。**私達により贈られたもの**（pūrtá-）**を、王よ、知れ。**そのようなものとして、神（Varu-

ṇa?）よ、好意を持つ者となれ。

ここで重視されているのは、最高天に達した祭主の認知の問題である。祖霊ないし神々が、彼がいかなる者であるかを知り、彼の祭ったものと贈ったものとを明らかにし、それを彼自身としっかり結び付けて離さないことが求められている。

この詩節は1-2と3-5とに二分され、~~火葬と直接に係わる~~前半部1-2はAgnicayanaのマントラとして用いられる：*KS* XL 13:147,11-14; *TS* V 7,7,1-2 bc; *VS* XVIII 59-60＝*ŚB* IX 5,1,46-47。1および2adに関してはAVとYVマントラとの間に大きな相違は無いが、2bcが変化しており、亡くなった祭主は神々の通り道（deva-yā́na- Pl.）を通って来るとされる（2c）[6]。なお後続するマントラ（*TS* V 7,7,2-3 f～*VS* XVIII 64）では祭られたものも贈られたものも祭主自身と同様に祭火が天に運ぶことが述べられている[7]。

他方、後半部3-5では、祭り贈る者と死者とのidentificationが特に取り上げられ、iṣṭā-pūrtá-の帰属の確認に重点が置かれる。この3-5は*VaitS* II 15＝*GB* I 5,21にPravara（Hotṛ祭官選び）の時に祭主が唱えるマントラとして挙げられ、さらに3は単独で*MS*, *KS*, *TB*, *ĀpŚS*の同様のマントラに、また*AB*のRājasūya終了時の献供のマントラに取り入れられている。いずれの場合も、祭式の開始（ないし終了）に際してこれから行う（ないし今執り行った）祭式の効力が他の誰でもなく祭主自身にのみ帰属する保証の役割を果たす（後述4参照）。なお4のpacāmiはバラモンへふるまう粥を炊く行為を意味していると解釈されるが、dattá-ないしpūrtá-の内容として特記されている事が注目される（後述3⑵参照）。

(3)

iṣṭā-pūrtá-と祭主との合体という主題は更に*YV*のAgnicayanaにおけるマントラにも現れる：*MS* II 12,4:148,6f.＝*TS* IV 7,13,5 m～*KS* XVIII 18:278,18f.＝*VS* XV 54＝XVIII 61＝*ŚB* VIII 6,3,23（＝*ĀpŚS* VI 1,3: Agnihotra開始時のマントラ）。*MS*・*TS*と*KS*・*VS*のグループとでは詩節の後半が異なるが、共通する前半部は：

úd budhyasvāgne prā́ti jāgṛhy enam （*KS VS* jāgṛhi tvā́m） |
iṣṭāpūrté sám̐ sṛjethām ayā́m̐ ca /

目覚めよ、火よ、彼（死者・祭主）に対して覚醒してあれ（*KS*・*VS*：君は

覚醒してあれ）；**祭られたものと贈られたものとして（Du.）君達両者は合体せよ、またこの当人も。**

Agnicayana はいわば祭主の火葬と天界上昇を生前に先取りする祭式と解釈されることから、死後に起こるべき iṣṭā-pūrtá- と祭主との合体が特にここに言及されていると理解される（上記 2(2) *YV* マントラ参照）。

(4)

MS I 8,6:123,18ff.（Agnihotra）には直接 iṣṭā-pūrtá- の語は現れないが、実質的にはそれを論ずる重要な一節がある：

yó vái bahú dadivā́n bahv ī̀jānò 'gním utsādáyate, 'kṣít. tád vái tásya. tád ījānā́ vái sukŕ̥to 'múṃ lokā́ṃ nakṣanti. té vā́ eté yā́n nā́kṣatrāṇi. yád āhúr, jyótir ávāpādi tā́rakā́vāpādī́ti, té vā́ eté 'vapadyanta. āptvā́ sthité tá idám̐ yathālokám̐ sacante yadā́mūtaḥ pracyávante. 'tha yó bahú dadivā́n bahv ī̀jānò 'gnihotrā́ṃ juhóti darśapūrṇamāsáu yájate cāturmāsyáir yájate bahū́ni satrā́ṇy upáiti tásya vā́ etád akṣayyám áparimitaṃ. tiró vā́ ījānā́d yajñó bhavati. tád ābhyā́m evā́gnībhyāṃ dagdhavyàḥ. svám̐ vā́ etád iṣṭám anvā́rohaty.

人が多く布施をなし、多く祭式を行った者として、〔自分の〕祭火を（死によって）片付けるならば、〔彼の iṣṭā-pūrtá-：祭式と布施の効力は〕（死によって）滅びないのだ。~~そのような（不滅の）~~それ（祭式と布施の効力）~~が彼のものとなる~~のだ。~~そのようにして~~祭式を行った善行者達はかの世界へ到達するのだ。星座達なるものは、そういうこの者達なのだ。人々が、「光が落ちたぞ。流れ星が落ちたぞ」と言う時には、そういうこの者達が落ちているのである。〔かの世界に〕到達し、留まった後（sthitē）[8]、彼らは、かの世界から去り出るや即ち、それぞれ〔自分の獲得した〕世界に応じて、ここ（地上）へと従う。~~次に~~、人が多く布施をなし、多く祭式を行った者として、Agnihotra を献じ、新満月祭を祭り、Cāturmāsya により祭り、多くの Sattra を行うならば、彼のこれ（iṣṭā-pūrtá-）は（永遠に）滅することなく測り知れないのだ。祭式を行った者から祭式は遠ざかってしまう（隠れてしまう）のだ。それ故に他ならぬこれら 2 つの火により彼（祭主）は焼かれねばならない。~~このようにして~~彼は、自分の~~祭った~~〔祭

式〕(iṣṭá-) を追いかけてその上に乗るのだ。

ここでは、善行者はあの世に到達して星座となるが[9]、やがて各自の獲得した世界に応じてあの世からこの世に転落するという考え方が示される（再死の観念がはっきり現れる恐らく最も古い資料の一つであろう）。同時に、多くの祭式・布施を行えば「(死によって) 滅びない」(akṣít)「それ」(tád) を得、多くの祭式・布施に加えてAgnihotra・新満月祭・Cāturmāsya・Sattraを行えば「(永遠に) 滅することなく測り知れない」(akṣayyám áparimitam)「これ」(etád) を得られると述べられている。後者により意図されているのは再死を免れ永遠にあの世に留まることであろう。あの世の生活はこの世に生存中に祭られた祭式と贈られた布施の効力 (iṣṭā-pūrtá-) から成り立つというのがこの時代の思想的前提であったと考えられるので（前述2(1)-2(3)、後述3(1)-3(2)参照)、akṣít と tád および akṣayyám áparimitam と etád で指示されているもの（中性単数）も iṣṭā-pūrtá- であると推測される[10]。また火葬により祭主が「自らの祭った祭式を追いかけてその上に乗る」、即ち火葬と祭式とが平行現象として呈示されていることが注目される。

(5)

上記の *MS* の末尾に対応する考え方が *ŚB* I 9,3,1-2（新満月祭）に見られる。ここにおいても iṣṭā-pūrtá- の語は用いられないが、祭火の道を通って天界へと向かう祭式と dákṣiṇā-（祭官への報酬）と祭主との関係が明瞭に示されている。

devaloké mé 'py asad íti vái yajate yó yájate. sò 'syaiṣá yajñó devalokám evā̀bhipráiti. tád anū́cī dákṣiṇā yā́ṃ dádāti sáiti. dákṣiṇām anvārábhya yájamānaḥ // sá eṣá devayā́no vā pitṛyā́ṇo vā pánthāḥ / tád ubhayáto 'gniśikhé samóṣantyau tiṣṭhataḥ. práti tám oṣato yáḥ pratyuṣyó. 'ty u tā́ṃ sṛjete yò 'tisṛ́jyaḥ.

1. …… 人が（祭主として）祭る時には、「神々の世界において私に〔それが〕やはりあるように」と〔考えて〕祭るのだ。そのようなものとして、彼のこの祭式は他ならぬ神々の世界へ向かって進み行く。その時、彼が与えるその dákṣiṇā- がつき従って行く。dákṣiṇā- に後ろからつかまって祭主が〔行く〕。　2. そのようなこれが、神々の通る道、あるいは父祖達の通る道である。そこでは両側に（二つの）焼き尽くす火むらが立ってい

る。焼かれるべき者であれば、その者を〔二つの火むらが〕焼く。もし通過させられるべき者であれば、その者を通過させる。……

以上引用した諸例を通じて、祭られた祭式も贈られた布施も最後に祭主自身も同じ祭火の道を通って天界に到達して合一し、祭られた祭式と贈られた布施とに対応する来世を享受するという共通の認識が看取される。

3　無尽の来世

(1)

AV III 29,1-8：Yamaの世界に死者が入る時には、彼のiṣṭā-pūrtá-の16分の1をYamaの集会に座している王達（王Yamaと祖霊達）[11]が自分達の分け前として徴収する。もし白い足の羊をsvadhā́-（祖霊達の食料）として彼らに与えるならばその税から解放され、尽きることのない来世を享受する。献じられた白い足の羊は来世と等量であり無尽であるとされる。

1．yád rā́jāno vibhájanta iṣṭāpūrtásya ˡ ṣoḍaśám yamásyāmī́ sabhāsádaḥ /
ā́vis tásmāt prá muñcati ˡ dattáḥ śitipā́t s$_u$vadhā́ //
Yamaの集会に座しているあれらの王達が〔祭主により〕祭られたものと贈られたもの（iṣṭā-pūrtá-）の16分の1を（自分達の分け前として）分かち取るところの、その〔16分の1〕から、足の白い羊は〔祭主を〕解放する、svadhā́-として与えられたならば。

2．sárvān kā́mān pūrayat$_i$y ˡ ābhávan prabhávan bhávan /
ākūtipró $_a$'vir dattáḥ ˡ śitipā́n nópa dasyati //
現れ出つつ、有能でありつつ、栄えつつ、〔彼は〕すべての欲望達を満たす。〔祭主の〕意図を満たす白い足の羊は、与えられたならば、尽きることがない。

3．yó dádāti śitipā́dam ˡ ávim lokéna sámmitam /
sá nā́kam abhyā́rohati yátra śulkó[12] ˡ ná kriyáte abaléna bálīyase //
〔祭主の死後の〕世界と同じ量である白い足の羊を与えるならば、その者は天穹へと登り着く、そこにおいては無力な者により強い者へ貢ぎ物[12]がなされないところの。

4. pā́ñcāpūpaṃ śitipā́dam ˡ ā́viṃ lokḗna sā́ṃmitam /
pradātó- ́upa jīvati ˡ pitṝ́ṇāṃ lokḗ ́a'kṣitam //
5つのケーキ（apūpá-）を伴う、世界と同じ量である白い足の羊を捧げる者は、父祖達の世界で、尽きること無いものを糧として生きる。

5. abc＝4abc ˡ sūryamāsā́yor ā́kṣitam //
……捧げる者は、太陽と月とにおいて、尽きること無いものを糧として生きる。

6. íreva nópa dasyati ˡ samudrá iva pā́yo mahā́t /
devā́u savāsínāv iva ˡ śitipā́n nópa dasyati //
〔それは〕元気づける飲物（írā-）の如くに、尽きることがない；海の如くに、大いなる乳として。共に住む2神（太陽と月？）の如くに、白い足〔の羊〕は尽きることがない。

(7-8略)

(2)

尽きることの無い来世がiṣṭā-pūrtá-から成るという考え方は、*AV*やブラーフマナにおいて、特にバラモンに献じる粥（Brahmaudanaないし Anvāhārya）と関連して発展する。粥（odaná-）は等量以上の水または乳で煮た玄米ないし玄麦に溶かしバターを注いだものであるが、Brahmaudanaと呼ばれるバラモンに粥を献じる祭式は、Śrauta祭としては祭火設置祭（Agnyādheya）の準備段階において、またGṛhya祭としてはSava-yajñaの一種として行われる。[13] 他方、Anvāhārya（「後で補われるべきもの」）は穀物祭終了時にバラモンにふるまわれる粥で、新満月祭ではこれが祭官への報酬（dā́kṣiṇā-）とされた（他の穀物祭ではこれが祭壇に置かれる時、祭官に報酬が与えられる）。[14] *AV*には多数のBrahmaudanaの歌があり、*KauśS*ではSava-yajñaに用いられているが、[15] 本来はより広く「バラモンに粥を献じる儀式」一般に関係していたと思われる。

煮られたもの（粥）——特にAnvāhārya——は贈られたもの（pūrtá-）の代表とみなされていた。[16]

GB II 1,5［新満月祭］

na vai paurṇamāsyāṃ nāmāvāsyāyāṃ dakṣiṇā dīyante. ya eṣa odanaḥ pacyate dakṣiṇaiṣā dīyate yajñasya ṛdhyā. iṣṭī vā etena

yad yajate. 'tho vā etena pūrtī ya eṣa odanaḥ pacyata. eṣa ha vā iṣṭāpūrtī ya enaṃ pacati. //
満月（祭）の日にも新月（祭）の日にも報酬達は与えられないのだ。この粥が調理されるならば、これが報酬として与えられる、祭式の成就のために。人が（祭主として）祭るならば、これにより iṣṭa-（祭られた祭式の効力）を持つ者なのだ。次にまた、この粥が調理されるならば、これにより pūrta-（贈られた布施の効力）を持つ者なのだ。人がそれを調理するならば、この者が iṣṭā-pūrta- を持つ者なのだ。

類似の表現は *TS* I 7,3,1-4に見られるが、ここではバラモンが神々と等置され[17]、またAnvāhāryaが祭式におけるPrajāpatiの分け前であり、Anvāhārya の粥の不滅により無尽の食物があの世で得られる[18]とされる：

1. parṓ'kṣaṃ vā́ anyé devā́ ijyánte pratyákṣam anyḗ; yád yájate yá evá deva̅́ḥ parṓ'kṣam ijyánte tā́n evá tád yajati; yád anvāhāryàm āháraty etḗ vái devā́ḥ pratyákṣaṃ yád brāhmaṇā́s tā́n evá tḗna prīṇāti / átho dákṣiṇaivā́syaiṣā́tho yajñásyaivá chidrám ápi dadhāti; yád vái yajñásya krūrám̐ yád víliṣṭaṃ tád anvāhāryèṇa //
2. anvā́harati, tád anvāhāryàsyānvāhāryatvám / devadūtā́ vā́ etḗ yád ṛtvíjo, yád anvāhāryàm āhárati devadūtā́n eva prīṇāti /……
3. ……/ yajñḗna vā́ iṣṭī́ pakvḗna pūrtī́, yásyaivám̐ vidúṣo 'nvāhāryà āhriyáte sá tv èvḗṣṭāpūrtī́ / prajā́pater bhāgṑ 'si // 4. íty āha / prajā́patim evá bhāgadhéyena sám ardhayaty /……/ 'kṣito 'sy ákṣityai tvā mā́ me kṣeṣṭhā amútrāmúṣmiṁ loká íty āha, kṣī́yate vā́ amúṣmiṁ lokḗ 'nnam, itáḥpradānaṁ hy àmúṣmiṁ lokḗ prajā́ upajī́vanti, yád evám abhimṛ́śáty ákṣitim eváinad gamayati nā́syāmúṣmiṁ lokḗ 'nnaṃ kṣīyate //
1. ある神々は目に見えない形で祭られるのだ、他の神々は目に見える形で〔祭られる〕。人が（祭主として）祭るときには、他ならぬ目に見えない形で祭られる神々、他ならぬそれら〔の神々〕をそのことによって〔祭官が〕祭ることになる。〔祭主が〕Anvāhāryaをふるまう（後で補う）時には、——バラモン達というもの、この者達は、目に見える形で神々なのだ——、他ならぬ彼らをそれにより満足させることになる。更にまた、これは彼（祭主）の謝礼に他ならない。更にまた、〔これは〕他ならぬ祭式

の穴を塞ぐ。祭式にもし怪我があれば、もし捻挫があれば、それを〔祭主〕は Anvāhārya により——2．埋め合わせる（後で補う）。それが Anvāhārya の Anvāhārya たる由縁である。祭官達というもの、この者達は神々の使者なのだ。〔祭主が〕Anvāhārya をふるまう（後で補う）時には、他ならぬ神々の使者を満足させることになる。……**祭式により〔人は〕iṣṭá-（祭られた祭式の効力）を持つ者なのだ、調理されたものにより pūrtá-（贈られた布施の効力）を持つ者なのだ。このように知っている者の Anvāhārya がふるまわれる（後で補われる）ならば、だがその人（祭主）こそが iṣṭā-pūrtá-を持つ者である。**「君は Prajāpati の分け前である」——4．と〔祭主は〕言う。他ならぬ Prajāpati に〔P の〕取り分を備えさせることになる。……「君は不滅である。不滅のために君に〔私は触れる〕。私のものである君が消滅するな、あちらで、あの世で」と言う。食物はあの世において消滅するのだ、この〔地上〕での贈与を糧としてあの世において生き物達は生きているのだから。このようにして〔祭主が Anvāhārya に〕触れると、これを他ならぬ不滅へと到らしめることになる。あの世において彼の食物は消滅することがない。

(3)

iṣṭā-pūrtá- の不滅を保証する手段について Keśin Dārbhya が黄金から成る鳥に変身した父祖の霊に教える話がブラーフマナに伝えられている：*KB* VII 4 ≅ *Vādhūla-Sūtra* IV 37（Anvākhyāna：CALAND *AcOr* VI 147ff.）～*JB* II 54。*KB* では、生前に一度だけ祭主として祭ったことがあり、その祭式の効力の滅尽を恐れる父祖の霊に、「一度だけ祭られた祭式の不滅」(sakṛd-iṣṭasyâkṣiti-) は「信じること」(śraddhā-) すなわち「この諸世界と自己の中にある水達 (āpas)」であること、「自己の中に不滅（＝水達）がある」と知っていて祭ればその効力が不滅であることを教える。この教説は *VādhS* では「祭式と布施の効力の不滅」(iṣṭā-pūrtasyâkṣiti-) として一般化される。*JB* では上記両 version とは異なり、祭官への報酬に際して最初に与えたものを次のもので「買い戻す (niṣkrīṇā-ti)」という手段による「祭式と布施の効力の不滅」(iṣṭā-pūrtasyâkṣiti-) が語られる。（この問題に関しては別に論ずる予定である。）

(4)

TB III 11,8 では、死神に三つの望みの選択を許された少年Naciketasが第二の望みとしてiṣṭā-pūrtá-の不滅を、第三の望みとして再死の回避を質問し、この両方の答えとしてAgnicayanaにおけるNaciketas火壇を教えられる。この話に基づく*Kaṭha-Upaniṣad*では質問が不死性（I 13）ないし死者の存在（I 20）に変化している。

4　iṣṭā-pūrtá-が祭主に帰属する保証

(1)

Hotṛ祭官選び（Pravara）に関する文献においては祭式・布施の効力（iṣṭā-pūrtá-）の帰属をめぐる議論の特殊な発展が跡づけられる。Pravaraは新満月祭（穀物祭の基本形）の規定中に定められ、一部の例外を除きすべてのŚrauta祭式に先行する。[19] 先ず神であるHotṛ祭官、即ちAgniをAdhvaryu祭官が招き、次に人間のHotṛ祭官をAdhvaryu祭官が任命するが、その際、Adhvaryu祭官が祭主の家系を述べる。（先祖のṚsi 3～5代を列挙する。祭主が王族なら、そのPurohitaの系譜を挙げる。）[20] 祭主の家系が述べられる時、祭主自身もマントラを唱え、祭式・布施の効力iṣṭā-pūrtá-が自己にのみ帰属する宣言をすることが、一連の文献に記されている。上述2(2)のごとく、*VaitS* II 15＝*GB* I 5,21によれば*AV* VI 123,3-5が祭主により唱えられる。*MS* I 4,11: 60,3-9～*KS* IV 14:39,5f.～*TB* III 7,5,4＝*ĀpŚS* IV 9,6では、*AV* VI 123,3が単独で（少し変形されて）マントラ冒頭に取り込まれている。

MS I 4,11:60,3-9

ná vái tád vidma, yádi brāhmaṇā̂ vā smó 'brāhamaṇā vā, yádi tásya vā ŕ̥seḥ smò 'nyásya vā, yásya brūmáhe. yásya ha tv èvá bruvāṇó yájate, tā́ṃ tád iṣṭā́m ā̂gacchati. nétaram úpanamati. tát pravaré pravaryámāṇe brūyāt. // dévāḥ pitaraḥ. pítaro devā. yó 'smi sá sán yaje. yó 'smi sá sán karomi. śunā́ṃ ma iṣṭā́ṃ, śunā́ṁ śāntā́ṁ, śunā́ṃ kṛtā́ṁ bhūyāt // íti. tád ~~vā~~ evá kā́śca sá sán yajate, tā́ṃ tád iṣṭā́m ā̂gacchati. nétaram úpanamati. yá

我々はそれを知らないのだ、我々がバラモンであるのか、或いは非バラモ

ンなのかを、我々がその者の〔子孫〕である（その者に帰属している）と自称している、そのṚsiの〔子孫〕なのか、或いは他の者の〔子孫〕なのかを。しかしながら、ある者の〔子孫〕であると自称しながら（祭主として）祭るならば、その者（＝始祖であるṚsi）へとその祭られた〔祭式の効力〕はやって来るのだ。別のある者の下へ従属することはない(ūpa-namati)。それ故、〔Hotṛ祭官〕選びが行われている時に、言う（唱える）べきである：**「父祖達である神々よ。神々である父祖達よ。私がそれである者、その者としてありつつ、私は（祭主として）祭る。私がそれである者、その者としてありつつ、私は行う。**めでたく私により祭られたものと、めでたく努められたものと、めでたく行われたものとなってほしい」と。他ならぬその場合には、誰であれ、そのような者としてありつつ祭ると、その者（祭主当人）へとその祭られた〔祭式の効力〕はやって来る。別のある者へ従属することはない。

自己と先祖とを結び付けるマントラを唱えているAdhvaryu祭官の傍らで、祭主自身は自分が先祖とは異なる現在の自分自身であり、従って自己の祭式と贈与の効力は先祖へではなく自己にのみ帰属すべきことを言明する。ここでは祭主と先祖とのidentificationの問題が祭式・布施の効力の帰属という観点から鋭く意識されて取り上げられている。祭主は祭主自身であって先祖ではなく、その（祭式）行為の結果は行為者、即ち祭主にのみ帰属するという個人主義が徹底されており、後に大乗仏教で発達する「廻向」(pari-ṇāma-)の概念との顕著な対比を示す。

上記の*MS*より更に発展した形を*TB* III 7,5,4＝*ĀpŚS* IV 9,6は示す：

dḗvāḥ pitaraḥ pítaro devāḥ / yȍ 'hám ásmi sá sán yaje / yásyā́smi ná tám antár emi / svā́ṃ ma iṣṭáṁ svā́ṃ dattám / svā́ṃ pūrtáṁ svā́ṁ śrāntám / svā́ṁ hutám / tásya me 'gnír upadraṣṭā́ / vāyū́r upaśrotā́ / ādityȍ 'nukhyātā́ / dyáuḥ pitā́ / pṛthivī́ mātā́ / prajā́patir bándhuḥ / yá evā́smi sá sán yaje /

父祖達である神々よ。神々である父祖達よ。私がそれである者、その者としてありつつ、私は（祭主として）祭る。私がその者の〔子孫〕であるところの者、その者の中に私は入って行かない。私により祭られたものは私自身のものである。〔私により〕与えられたものは私自身のものである。〔私により〕贈られたものは私自身のものである。〔私により〕努められた

ものは私自身のものである。〔私により〕献供されたものは私自身のものである。火は、そのような私の目撃者である、風は傍聴者である、太陽(ādityá-)は証言者である、天は父である、地は母である、Prajāpatiは親族である。私がまさしくそれである者、その者としてありつつ、私は(祭主として)祭る。

ここでは明確な形で、自己により祭られたもの(iṣṭá-)、与えられたもの(dattá-)、贈られたもの(pūrtá-)、努められたもの(śrāntá-)、献供されたもの(hutá-)が自己の所有物(svá-)であると宣言され、火・風・太陽がその証人として挙げられている。

(2)

この *TB* と極めて類似する内容が、Rājasūyaにおける祭式終了時の献供の際にクシャトリヤである祭主の唱えるべきマントラの中に見られる：

AB VII 24, 3

…… kṣatram prapadye kṣatriyo bhavāmi / "devāḥ pitaraḥ, pitaro devā, yo 'smi sa san yaje / svaṃ ma idam iṣṭaṃ, svaṃ pūrtaṃ svaṃ śrāntaṃ, svaṃ hutam / tasya me 'yam agnir upadraṣṭāyaṃ vāyur upaśrotāsāv ādityo 'nukhyātedam ahaṃ ya evāsmi so 'smī"-iti.

…… **私は王権に到る、私はクシャトリヤ(王権に与る者)になる。父祖である神々よ、神々である父祖達よ、私がそれである者、その者としてありつつ、私は(祭主として)祭る。**ここに私により祭られたものは私自身のものである。〔私により〕贈られたものは私自身のものである。〔私により〕努められたものは私自身のものである。〔私により〕献供されたものは私自身のものである。ここにいる火が、そのような私の目撃者である、ここにいる風が傍聴者である、かなたにいる太陽(āditya-)が証言者である。今ここにおいて、私はまさしく自分がそれであるところの者、その者に他ならない」と〔唱える〕。

クシャトリヤである祭主は潔斎後はbrahman-(中性)に到達してバラモンとなっているが、祭式終了時に再びクシャトリヤに戻るとみなされる。この時、brahman-に属するAgni等が祭主から威光等を奪い取らないように祈願すると共に、彼が祭り贈ったものがクシャトリヤである彼自身に帰属することを宣

言するものであり、祭主と先祖との関係はここでは問題となっていない。なおこの直前の*AB* VII 21,1-3 および 22,1-7では Rājasūya の潔斎の前と祭式終了間際に「(クシャトリャである祭主の) iṣṭā-pūrtá-の非喪失 (iṣṭā-pūrtasya aparijyāni-)」という献供をなすべきことが述べられている。

(3)

上記 4 (1)に見た *TB* (＝*ĀpŚS*) と 4 (2)に見た *AB* のマントラの後半部分の内容にあたるものが、長期の Sattra (恐らく 1 年間：Gavāmayana) を開始する時に承知していなければならない事柄として *TS* III 3,8,5の解説部分 (ブラーフマナ) に記述されている。

…… áhnāṃ vidhā́nyām ekāṣṭakā́yām apūpáṃ cátuḥśarāvam paktvā́ prātár etḗna kakṣám úpauṣed. yádi // 4 // dáhati puṇyasámam bhavati. yádi ná dáhati pāpasámam. etḗna ha sma vā́ ŕ̥ṣayaḥ purā́ vijñā́nena dīrghasattrám úpa yanti. yó vā́ upadraṣṭā́ram upaśrotā́ram anukhyātā́raṃ vidvā́n yájate sám amuṣmiṁ loká iṣṭāpurtḗna gachate. 'gnír vā́ upadraṣṭā́ vāyúr upaśrotā́dityò 'nukhyātā́. tā́n yá evā́ṃ vidvā́n yájate sám amuṣmiṁ loká iṣṭāpurtḗna gachate ……[21]

…… 昼間達 (日々) を分かち定める Ekāṣṭakā の日に、4 皿分のケーキ (apūpá-) を焼いて、翌朝これにより藪に火をつける。もし〔その火が藪を〕焼くならば〔その年の収穫が〕良い〔年に〕匹敵するものとなる。もし焼かなければ、悪い〔年に〕匹敵するものとなる。この判断 (vijñā́na-) により R̥si 達はかつて永い Sattra に入ったものであった。目撃者、傍聴者、証言者を知っていて (祭主として) 祭るならば、その者はあの世で iṣṭā-pūrtá- と合体する。Agni が目撃者、Vāyu が傍聴者、太陽 (ādityá-) が証言者なのだ。彼らをこのように知りつつ (祭主として) 祭るならば、その者はある世で iṣṭā-pūrtá- と合体する。……

ここでは「誰が祭り贈ったか」の証人として火・風・太陽を認識していることがあの世において iṣṭā-pūrtá- と合体するための条件とされている。

以上の諸例は祭式行為の主体とその結果の享受者との関係を追求する議論であるが、「誰が祭り贈ったか」を神々ないし祖霊の前に明らかにすることにより、祭主が死後自分自身のiṣṭā-pūrtá- と合体できる保証を求める *AV* VI 123

以来の思索の展開の中にある。

5　iṣṭā-pūrtá- の奪取

(1)

AB VIII 15,1-3：Rājasūya において灌頂（Abhiṣeka）に先立ちクシャトリャである祭主と祭官（Purohita）との間に、もし祭主が祭官を欺くことがあれば、祭主の全生涯にわたる祭式と布施の効力を祭官が奪い取るべしという誓いが交わされる。

2．“yāṃ ca rātrīm ajāyethā yāṃ ca pretāsi, tad ubhayam antareṇeṣṭāpūrtaṃ te lokaṃ sukṛtam āyuḥ prajāṃ vṛñjīyaṃ yadi me druhyer” iti. 3. …… “yāṃ ca rātrīm ajāye 'haṃ yāṃ ca pretāsmi, tad ubhayam antareṇeṣṭāpūrtam me lokaṃ sukṛtam āyuḥ prajāṃ vṛñjīthā yadi te druhyeyem” iti.

2．「君が生まれた夜と、君がこの世を去るであろう夜、それら両者の間に、君の（君により）祭られ贈られたもの〔の効力〕、〔死後の〕世界、為された善い行い、寿命、子孫を私はねじり取るであろう、もし君が私を欺くならば」(祭官の言葉)。3.……「私が生まれた夜と……私の……君はねじり取るがよい、もし私が君を欺くならば」(王の言葉)。

(2)

TB III 10,10,1-2 ［Agnicayana］

1. iyā́ṃ vā́vá sarā́ghā / tā́syā agnī́r evá sāraghā́ṃ mā́dhu/ yā́ etā́ḥ pūrvapakṣāparapakṣā́yo rā́trayaḥ / tā́ madhukṛ́taḥ / yā́ny ā́hāni / té madhuvṛṣā́ḥ / sá yó ha vā́ etā́ madhukṛ́taś ca madhuvṛṣā́ṃs ca véda / kurvā́nti hāsyaitā́ agnā́u mā́dhu / nā́syeṣṭāpūrtā́ṃ dhayanti / ā́tha yó ná véda / 2. ná hāsyaitā́ agnā́u mā́dhu kurvanti / dhā́yanty asyeṣṭāpūrtā́m / ……

1．実にこの〔大地〕は蜜蜂である。他ならぬ〔祭〕火が彼女の蜂蜜である。前半月と後半月における夜達であるもの、それらは働き蜂（雌）達である。昼であるところのもの、それらは雄蜂達である。これらの働き蜂達と雄蜂達とを知っているならば、その者の〔祭〕火においてこの者達は蜜

を作る、彼の iṣṭā-pūrtá- を吸わない。つぎにまた、知らないならば、2. その者の〔祭〕火において彼らは蜜を作らない、彼の iṣṭā-pūrtá- を吸う。(以下略)

昼と夜（即ち「時間」）が祭式と布施の効力（＝来世）を奪い取るという考え方は他のブラーフマナにも対応が見られる。[22]

(3)

「信じて祭式・布施を行うこと」(śraddhā́-) により不滅の iṣṭā-pūrtá- が祭主のものとなるという思想は早くから定着・普及していたと思われるが（前述 3 (3)参照)、bhṛguの他界巡りの話（*ŚB* XI 6～*JB* I 42-44）において新たな発展を示す。*ŚB* では bhṛgu の目撃した美しい女（kalyāṇī́-）と美しすぎる女（ātikalyaṇī-）とがそれぞれ「信ずること」(śraddhā́-) と「信じないこと」(ā́śraddhā-) であり、Agnihotra における先の献供ないし後の献供により勝ち得られると説明される。ここでは信じて行う祭式のみならず、信じないで行う祭式の効力さえも獲得することが意図されている。*JB* では Agnihotra の効用が一層強調され、それなしではどちらの祭式の効力も彼女達のものになると明言される。

6　iṣṭā-pūrtá- の理論の展開とアートマン論

以上のように、iṣṭā-pūrtá- の理論は祭式・布施と祭主の来世との関係を探求する思想としてヴェーダ文献の比較的早期に重要な役割を果たした。この基盤の上に立って、更にその次の段階としてブラーフマナ文献では、祭式から来世のアートマンが生ずるという思想が発達する。このアートマン理論の成立に際しては、様々な先行思想の合流が推測される。例えば、1)祭式と布施の効力 (iṣṭā-pūrtá-) が天界で祭主を待ち、死後合体する；祭主の来世は iṣṭā-pūrtá- から成る。2)祭火を設置し（ā́hitāgni-）朝夕アグニホートラを献じる者 (agnihotrín-) は死後、祭火に自ら献供として投ぜられ（火葬)、そこからあの世に再生する；祭火が彼の第 2 の母胎となる。3)ソーマ祭の潔斎（dīkṣā́-）においては自身を犠牲（yajñá-）として神々に捧げるが、祭火＝母胎から再び生れる。4)同様にソーマ祭の潔斎において自身を犠牲（yajñá-）として神々に捧げるが、その後別の犠牲を捧げることにより自分自身を買い戻す（ātma-niṣkrā́yaṇa-）；この世におけるアートマン（自分自身）の他に、捧げられた犠

牲（yajñá-）が天界において第２の（来世の）アートマンとなって祭主を待つ。いずれの場合にも、祭火に投ぜられた献供が祭火の道を通って天に到達するという思想が根底に窺われる。このアートマン理論成立の問題については別に稿を改めて論じたい。[23]

（１） 語根 parⁱ（pṛṇā́ti）“geben, schenken, spenden” については、MAYRHOFER：*Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* s.v. 参照。iṣṭā-pūrtá- の語義は既に WINDISCH（*Festgruss an O.v. Böhtlingk*, 115-118）が “das Geopferte und Geschenkte” と正しく把握し、PW, GRASSMANN, LUDWIG 等の誤りを指摘している。yaj と parⁱ のそれぞれの派生語が祭式と贈与の効力という文脈において並列的に現れる例（*RV* I 125,4; VI 28,2）についても WINDISCH loc.cit. 参照。iṣṭā-pūrtá- の前肢が中性複数形に基づき、複合語全体としては中性単数として用いられることについては Altindische Grammatik II-I 160（および補遺49）参照。Dual の活用形はそこに挙げられる箇所（*VS* XVIII 60; *TB* III 11,8,5）の他に Saṁhitā/Brāhmaṇa 文献では *MS* II 12,4：148,6＝*TS* IV 7,13,5 m（2(3)参照）および *TS* V 7,7,1-2 c（＝*VS* XVIII 60＝*ŚB* IX 5,1,47; *AV* VI 123,5の異読；2(2)および註(6)参照）にも現れる。

（２） 後に karman- と phala- の理論、あるいはミーマーンサー学派の a-pūrva- の理論として発達する考え方の先駆がここに見られる。

（３） バラモンは「人間である神々」とみなされ（3(2)および註(17)参照）、バラモンへの贈り物は神々への献供と同一視されるので、現実には祭火に献じられないにもかかわらず、祭火に献じられたと同様の道筋をたどり天に到達するとされた（2(2)および註(7)：*TS* V 7,7,2-3 f; 2(5) *ŚB* I 9,3,1-2 参照）。また、穀物祭終了時にバラモンに献じられる粥 Anvāhārya は、祭式における Prajāpati の取り分とされた（3(2) *TS* I 7,3,1-4 参照）。なお、献供が祭火の道を通って天に至り、そこから水・光熱等のエネルギーとして再び地上に戻るという考え方はリグ・ヴェーダ以来のエネルギー循環の思想を基盤としている。

（４） 「わが家（ásta-）」が最高天における Yama の世界を指すのか、地上の人間界のそれを指すのかは不明。後者の場合、祖霊祭への招魂を指すと考えられる（GELDNER：*Der Rigveda* III 144 Fn.1)。「身体／自己（tanū́-）」も天界におけるそれか地上におけるそれか二様の解釈が可能である。前者とする GELDNER の見解（*op.cit.* 143 8d “mit einem für die Genüsse der Himmelswelt geeigneten Körper”）が妥当であると思われる。その場合は、後に発達する来世におけるアートマンの理論との関連が注目される（6参照）。もし地上での身体が意図されているとしたら、祖霊が再びこの世

に戻って再生すること、即ちある種の輪廻転生が既に考えられていたことになる（井狩弥介：人文学報第65号［1989］75f.参照）。後の祖霊祭の展開（Piṇḍapitṛyajña 等; CALAND : *Altindische Ahnenkult* 8，10，13参照）においては、祖霊がその家系の男児として生まれ変わるという考え方が背後に推測され得るが、このṛcの段階でそこまで含意されていたかどうかは不明。

(5)　II 12,4（=Paippalāda II 5,4,）; III 12,8; III 29,1（Avi-sava; 3 (1)参照）; VI 123,2（火葬；2 (2)参照）; XVIII 2,57; XVIII 3,58（≅ *RV* X 14,8：2 (1)参照）.

(6)　2b : *KS* …… vida lokam asya「彼の〔死後の〕世界を君達は知っている」; *TS*＝*VS*＝*ŚB* …… vidā́ rūpā́m asya「彼の〔死後の〕形態を知っている」。2c : *KS*＝*TS*＝*VS*＝*ŚB* yā́d āgacchāt pathī́bhir devayā́nair「〔彼が〕神々の通る道達を通って来るであろう時」。2d : *TS*＝*VS*＝*ŚB* iṣṭā-pūrté（Dual; 註(1)参照）。

(7)　yā́d iṣṭā́m yā́t parādā́nam yā́d dattā́m yā́ ca dā́kṣiṇā / tat agnī́r vaiśvakarmaṇā́ḥ sū́var devḗṣu no dadhat //「祭られたもの、かなたへの贈り物、与えられたもの、かつまた謝礼、それを、すべての行為をなす火は我々のために神々のもとへ、太陽光へと置く」。

(8)　sthitḗ は時を表す Lok.「～した後で」。BODEWITZ : *The Daily Evening and Morning Offering* …… 161参照。OERTEL : *The Syntax of Cases* …… 299f.は "impersonal locative absolute" と解す。DELBRÜCK : *Altindische Syntax* 407f.は Abs. āptvā と共に用いられている sthā を助動詞として解釈する。

(9)　祭主として祭った者が星座になるという考え方については *TB* I 5,2,5 f.（散文）参照。

(10)　この見解は既に BODEWITZ *loc. cit.* に示されている。

(11)　原義は「自決力」；「祖霊達が自由に取ることのできる食料（祭火により運ばれる必要がない）」の意か？　なお OLDENBERG : *Die Religion des Veda* 531 Anm.3参照。

(12)　ROTH / WHITNEY（LINDENAU）版では śuklṓ となっているが、それ以外の刊本とそれらの挙げる写本は全て śulkṓ を示す。

(13)　Agnyādheya における Brahmaudana については KRICK : *Das Ritual der Feuergründung* 232-318（粥の作り方に関しては245ff.）; HILLEBRANDT 105f.; Savayajña におけるそれについては GONDA : *The Savayajñas* 参照。粥については更に永ノ尾信悟 : *MSS* 44-1（Fg. HOFFMANN）15-27（特に18f.）参照。

(14)　HILLEBRANDT 113; KRICK *op. cit.* 373-376参照。Anvāhārya はソーマ祭には用いられない（*ĀpŚS* X 4,12）。

(15) 例えば*AV* IV 35,1-8 (Brahmaudana) の繰り返し句 tḗnaudanḗnā́ti tarāṇi mṛtyū́m「その粥により私は死を乗り越えたい」は*ĀpŚS* IV 11,3では新満月祭のAnvāhāryaに用いられている。

(16) 次の2例の他に、2(2) *AV* VI 123,4参照;さらに*AV* VI 122,3に対応する*TĀ* II 6,7 (~SCHROEDER: *Tübinger Kaṭha-Hss*. p.76 =*Kāṭhakasaṃkalana* p.132) ではpakvā́mの代わりにpūrtā́mが現われる。

(17) Cf. *MS* I 4,6: 54,3-9 ~*GB* II 1,6; *KS* VIII 13: 97,11-13 ~ *KapS* VIII 1.

(18) Cf. 新満月祭マントラ*TS* I 6,3,3 q=I 7,1,6=*KS* V 2: 45,15= *ĀpŚS* IV 10,9 (Puroḍāśa) = *TB* III 7,5,7 (Puroḍāśa) ~ *MS* I 4,12 (:62,6) ~ *Vait* 3,20=*GB* II 1,7.

(19) Cf. *ŚB* I 4,2,1ff.; 5,1,1ff. etc. AgnihotraはAdhvaryu祭官が1人で挙行するのでPravaraが不要;なお祭官が祭主自身であってもよい(特にparvanの日:*ĀpŚS* I 11,1; VI 15,14f.)。またCāturmāsya祭でもPravaraが行われず、祭主の祖先である聖仙の名も列挙されない(永ノ尾:国立民族学博物館研究報告、X-4, 1985 [1986], 1046)。

(20) 後にはPravaraは家系図を意味するに至る。Cf. WEBER: *Indische Studien* IX 322-326; BROUGH: *The Early Brahmanical System of Gotra and Pravara* 8ff.

(21) EkāṣṭakāとはPhālganaPhālugana月の満月(=新年)に先立つ(即ち、Māgha月の満月に続く)黒半月の8日目であり、旧年の末尾に位置する日として特別な重要性を与えられ、祖霊祭が行われると共に、上記の如く藪焼きがなされる (HILLEBRANDT 6, 94-96参照)。ソーマ祭 (Sattraを含む) は本来新年 (Phālugana月の満月の日) に本祭が開始されたと推測されるが、ここでは1年間続くSattraであるGavāmayanaの潔斎がEkāṣṭakāの日に始まることを述べていると思われる (*TS* VII 4,8,1; *KātyŚS* XIII 1,2参照)。なおGavāmayanaの潔斎の開始日は文献により相違する (HILLEBRANDT 157参照)。

(22) Cf. *ŚB* II 3,3,11-12 〔昼と夜とが祭主の善行を滅ぼす〕; *JB* I 18~46 〔昼と夜が死者の世界を奪い取る〕。蜜蜂の比喩については世界を蜂の巣に例える*ChU* III 1-5ならびに*JB* III 360の創世神話 (K.HOFFMANN: Aufsätze zur Indoiranistik I 111 f. 〔*IIJ* 4, 1960, 35 f.〕; II 516 ff. 〔*MSS* 27, 1970, 59-67〕参照) が想起される。

(23) *ŚB* VI-X (Agnicayana) を中心に伏見誠氏が資料を発表している (「祭祀においてつくられるātman」『インド思想史研究』7, 1995, 36-50)。

〔略語〕

RV	*Ṛg-Veda*
AV	*Atharva-Veda* (*Śaunaka*)
YV	*Yajurveda-Saṁhitā*
MS	*Maitrāyaṇī Saṁhitā*
KS	*Kāṭhaka-Saṁhitā*
KapS	*Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṁhitā*
TS	*Taittirīya-Saṁhitā*
VS	*Vājasaneyi-Saṁhitā* (*Mādhyandina*)
AB	*Aitareya-Brāhmaṇa*
JB	*Jaiminīya-Brāhmaṇa*
TB	*Taittirīya-Brāhmaṇa*
ŚB	*Śatapatha-Brāhmaṇa* (*Mādhyandina*)
GB	*Gopatha-Brāhmaṇa*
TĀ	*Taittirīya-Āraṇyaka*
ChU	*Chāndogya-Upaniṣad*
ĀpŚS	*Āpastamba-Śrauta-Sūtra*
KātyŚS	*Kātyāyana-Śrauta-Sūtra*
KauśS	*Kauśika-Sūtra*
VaitS	*Vaitāna-* (*Śrauta-*) *Sūtra*
HILLEBRANDT	A.H.: *Rituallitteratur*. Straßburg 1897.

（さかもと（ごとう）じゅんこ・大阪市立大学助教授）